

2021年4月18日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「何も残らない日が来る」イザヤ書 39 章 1～8 節

主任牧師 加藤 誠

「万軍の主の言葉を聞きなさい。王宮にあるもの、あなたの先祖が今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らなくなる日が来る、と主は言われる」(イザヤ書 39 章 5-6 節)。

聖書には「預言者」と呼ばれる人たちが登場します。日本語では「言葉を預かる者」と書くのですが、単に未来に起こることを「予言」するのではなく、「神がわたしたちに語りかけられている言葉を預かり、人びとに語る人」のことであります。

私たちがもっている「聖書」の前半部分(旧約聖書)をルーツにもつイスラム教には「五大預言者」と呼ばれる人たちがいます。ノア、アブラハム、モーセ、ナザレのイエス、そしてモハンマド(マホメット)の五人です。イスラム教は、旧約聖書の三人とイエスを、神の言葉を預かり語る預言者と認めているのです。もっともその五人の中で一番偉大な預言者はモハンマドなのですが。

今朝、ご一緒に開いたのは旧約聖書の時代に活躍したイザヤという預言者の言葉です。旧約聖書の中でもっとも有名な預言者と言ってよいかもしれません。イエス・キリストの誕生を預言し、旧約聖書と新約聖書をつなぐ大切な役割を担った人です。

時代的に言うと、主イエスが誕生する約700年前のダビデ王国で神の言葉を語りました。今日の箇所ではイザヤはヒゼキヤという王様に向けて語っています。

ヒゼキヤ王は、「ダビデ王国のすべての王の中で、これほどの王はいなかった」(列王記下 18 章)と聖書に書かれているくらい、信仰的にも政治的にも「名君」と称えられた人です。特に聖書はヒゼキヤに起こった「二つの奇跡」を記しています。一つはアッシリアのセンナケリブ王の18万人もの大軍に都エルサレムが囲まれる絶体絶命の危機に陥った時に、神がアッシリア軍に疫病を流行らせて敗走させ、センナケリブ王は帰国するやいなや息子によって暗殺されてしまったこと。もう一つはヒゼキヤ王が死の病にかかったときに、神が彼の嘆願を聞き入れて、その寿命を15年伸ばしたことです。この「二つの奇跡」によって、ヒゼキヤは「ダビデ王国を絶体絶命から救った王」、「神から最も愛された王」と褒められたのでした。

ところが、そのヒゼキヤが死の病から生還してホッとしたというか、気が緩んだのでしょうか。ヒゼキヤの全快祝いにやってきたバビロンの使者に王宮の宝物庫や武器庫をぜんぶ見せてしまい、預言者イザヤから厳しく叱られる...というのが今朝の箇所です。当時、バビロンは、ダビデ王国を苦しめてきたアッシリアに対抗する反アッシリア同盟の盟主として期待された国でしたから、ヒゼキヤとしては、バビロンと緊密な同盟関係を組むことで、「もうアッシリアに苦しめられることはない」という政治的思惑があったのでしょうか。バビロンの使者を大歓迎して、王宮の中を隅々まで案内したのでした。

ところが、そのヒゼキヤ王を、預言者イザヤが厳しく叱っているのが、今朝の箇所

所です。「万軍の主の言葉を聞きなさい。王宮にあるもの、あなたの先祖が今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らなくなる日が来る、と主は言われる。あなたから生まれた息子の中には、バビロン王の宮殿に連れて行かれ、宦官にされる者もある。」

つまり「あなたはバビロンと同盟を組むことで安泰と思ったようだが、愚かなことに、そのバビロンによってダビデ王国は滅ぼされることになる！」と、イザヤは厳しくヒゼキヤの誤りを指摘したのでした。

今日のこのお話しから、私たちは何を聴くのでしょうか。

一つは「王が見ているもの」と「預言者が見ているもの」の違いです。王は現実の国と国との力関係、どの国と同盟を結んで自分たちの国の安泰を確保するかに心砕いています。為政者としては当前のことかもしれません。一方、イザヤは神のまなざしが見ておられるか、そして神が何を語りかけておられるかを聴こうとする、そのことに心を砕いています。どんなに人間の目に「成功」とか「安泰」に見えたとしても「神さまはどう見ておられるだろう？神さまは何を語っておられるだろう？」、それを第一に心砕くことの大切さをイザヤは示すのです。

もう一つは「人間の評価、賞賛の危うさ」です。ヒゼキヤ王は「名君」と称えられました。信仰的にも模範的だと称えられました。ヒゼキヤに起こった「二つの奇跡」をもって彼を褒めたたえたのです。人間はそのように「目に見える成功」＝「神の恵み」とすぐに結びつけてしまい、逆に「理由の分からない苦難」＝「神の恵みの不在」と結びつけてしまいがちです。しかし「神の恵み」はそう単純ではありません。「理由の分からない苦難」の中にも「深い神の恵み」が隠されているからです。今は理由が分からなくても、あとになって「そうだったのか！」と神さまの恵みを教えていただける時が来るからです。逆に「奇跡的な勝利」とか「奇跡的な病気の癒し」にうかれて、私たち人間が「神への畏れ」を失い、大切なところからずれていってしまうことが起こるのです。

ヒゼキヤは「二つの奇跡」によって、その大切なことを忘れてしまったのかもかもしれません。ヒゼキヤはその模範的な信仰を褒めたたえられました。けれどもどんなに人々から模範的と称えられたとしても、その信仰は完全ではありません。不確かなもろさをいつも抱えているのです。なぜなら信仰は「私たちのもの」ではないからです。信仰というものが、私たちが努力して得たものなら私のものであり、失うことはないでしょう。けれども信仰は本質的に「神さまからのもの」です。ですから信仰とは不思議なもので、私たちが「神さま、今日、わたしに信仰を届けてください」と祈ることを止めたなら、あっというまに失われてしまうものです。昨日、確かにあったはずの信仰が今日どこかに消えてしまう。それが私たちの信仰のもろさであり、不確かさです。それゆえ「神さま、今日、わたしに信仰を届けてください」と祈ることを忘れずに歩みたいのです。